

経済危機の構図 (17)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

明治維新の群像 ③

幕末の福井藩 福井は格式高い貧乏藩

■春嶽の出自と政治姿勢

慶永は好んで春嶽という号を用いた。御三卿の一つ田安家に生まれ、尾張、紀伊、水戸の御三家に並ぶ家柄で、二代将軍家慶は従兄弟だった。一八三八(天保九)年、春嶽はわずか一歳で一六代の福井藩主となった。江戸の福井藩邸で中根雪江ら重臣に迎えられて藩政に携わるが、当時の借財は九〇万両を超え、藩の年収四万両の二五倍と巨額だった。一六歳でお国入りの際に水戸斉昭を尋ねて教えを請うた。斉昭は、後の將軍徳川慶喜の実父であり、このとき四四歳だった。春嶽のあまりの熱心さに感心して、懇篤な長文の手紙も送っている。

水戸徳川家には伝統的な尊王思想があり、水戸学が根付いていた。斉昭は藩政改革を進めるとともに、幕府の政治に対してもしばしば積極的な提言をして衆目を集めていた。春嶽の政治姿勢に色濃く影響を与えた。

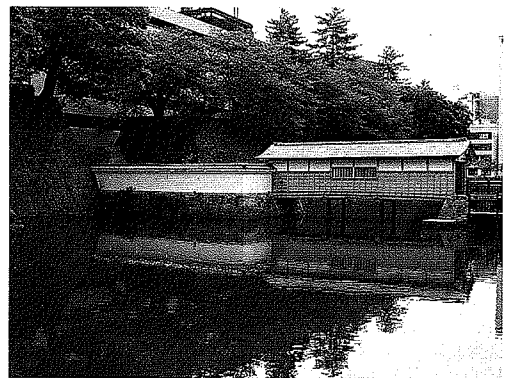
■重なる天災飢饉 財政が困窮

福井藩は天保の大飢饉で壊滅的な打撃を受けた。一八三六(天保七)年は天候異変で、四月にひょうが降り麦作が全滅した。五月は長雨が続き田畑は洪水に沈んだ。秋には数回の台風が押し寄せて収穫は皆無だった。米価がはね上がり、建具から鍋釜まで売って食糧に換えた。冬には大雪に襲われ、寒さに凍えて風邪が流行った。

大飢饉と病気で多くの死者が出た。領内の餓死者は六万人を超え、死体が野ざらしとなり街中は行き倒れた人で溢れ、福井の明里村の仕置場や西別院裏などに大穴を掘って埋めた。二年続けて大火事が起き、八〇〇戸を焼失した。こうして藩は窮乏し、一八五四(安政元)年の財政赤字は二万両に達した。

■人材登用し、藩政改革

春嶽は初入院と同時に越前海岸を視察した。異国船の到来に無防備であることを指摘し、要所に砲台の構築を命じた。努めて領内を巡回し、直接庶民の生活に触れた。山間部も歩き、農家を訪れて実際に百姓が食べていたひえやあわも口にした。米は祭りや法事などでしか口に入らない。貧しい領民の暮らしを豊かにするにはどうした



福井城址のお廊下橋

らよいか。

「藩内を良くするには、まず有能な人材の活用が第一」と考えた。従来の門閥にとらわれず、実力のある人物を積極的に登用し、藩重臣の人事も刷新した。鈴木主税を頭取に抜擢し、一〇〇石の三岡八郎(後の由利公正)を起用して藩政の建て直しに効果を上げた。わずか二五石の橋本左内を起用して教育の刷新や幕政改革(將軍継嗣問題)にもあたらせた。

■横井流・国是三論の展開

前にも書いたように横井小楠は、春嶽からぜひひと頼まれて、はるばる熊本からやってきて政治顧問になった。それまでの財政建て直

しでは、家臣の給付を減らし、領民から重税を取る。衣服も木綿ものを着て食事は一汁一菜という緊縮型だった。効果は上がらず藩内の活気が失われ、貧困と沈滞の悪循環から抜け出せなかった。

小楠は新たな「民富論」を唱えた。領内の産業を活発にして民を豊かにすれば、自ずと藩の税収も増えるという積極政策だ。彼は儒学者であり、富国論、強兵論、士道の三つからなる「国是三論」を説いた。どうすれば国は富むのか。農家は麻や生糸を、婦女子は養蚕や織物を、職人は漆器や打刃物などの産物を、それぞれの立場で産物を盛んにする。それらの産物を藩が買い上げ、品質を管理して信用を付けて他国に売る。

富を増やすのは領民のためであり、国を治めることは民を治めること。武士はその脇役に過ぎない。その理論を基にして藩の産業振興を具体的に指導した。

■流通改革と民の利益を優先

小楠の政策は、藩が商業の主権を握ってリードし、農民生産者に資金を融通して産業を興す二本柱だった。これまで麻、生糸、漆などの生産物はすべて商人に売り渡されて、価格は安く悪徳商人にた

たかれて半額ぐらいいしか生産者に入らなかった。

これを藩に直接納入させる。流通過程に特権商人や高利貸しを介入させないようにした。価格は民に利益を与えて官は損をしない程度とする。藩の利益より民の利益を厚くするものだった。資金に困る者には、藩が産業資金を薄利で貸した。今でいう制度融資である。

■藩立民営の総会所と藩札

・領民が生産したものは藩立の「産物総会所」が買い付ける。
・その支払いは藩札とする。藩札はいつでも正価に代えられる。
・集まった産物は総会所が責任をもつて品質管理し輸出する。
こうすれば信用が高まり、多額の現金が入る仕組みにした。藩札を発行するには、発行額を裏付ける正貨の準備が必要だった。目標額は五万両。小楠の方針に賛同した三岡八郎が、藩内を歩き回って町家を説得した。交易で儲かった

実例をあげ、ソロバンを弾き、これだけ儲かったと説明した。

初めは渋った商人らも、その熱心さに動かされた。実際に利益を手にする信用が増え、準備金も集まり、取引量は確実に増えていった。農家の副収入も町家の商

いも増えて潤った。城下に明るさが増し、物乞いの姿も消えた。

■活発な交易で財政も再建

産物総会所は藩が管理するが、実際の取引は商人と生産者から選ばれた代表に委ねた。主な商品は麻糸、木綿、生糸と織物、蚊帳地や茶などで、特に養蚕に力を注いだ。城下町の倉庫は産物でいっぱいになり、三国湊から船に積んで諸国へ売りに出た。

■越前長崎に藩の蔵屋敷を建て

「越前商會」を設け、小曾根乾堂を御用商人に登用し、オランダをはじめ外国商人と取引した。品質が良く「藩が保証する絶品」と信頼を得て、現金商売でドルで支払ってくれた。生糸の取引額は一八五九(安政六)年に二五万両、翌年には五〇万両に達した。換金した小判を馬に積んで運んだ。「越前さまの小判行列じゃ」と人々は目を見張った。これが評判となり、ますます福井藩の信用は高まった。

■下関には蔵屋敷を置いた

北前船を活用して長州藩で砂糖を仕入れ、長崎には生糸を、蝦夷地へはワラを運んだ。一八六二(文久元)年には内外に輸出した産物の総額は三〇〇万両に達し、藩札は次第に

正貨に代わり、金庫には常時五〇万両の正貨を貯えた。こうした活発な交易で、福井藩は財政建て直しに成功した。

■織物王国の基礎づくり

絹織物の生産技術を開発した。北陸は大雪が降り積もり、雨の日も続き湿気が多い。そのマイナスを活かした産業を考えた。濡れた生糸を捲いて絹布を織る、独特の絹織物製造の道を開いた。慶応三年に藩士佐々木権六を米国に派遣し、織機二台を購入して工夫を重ねた。

■由利公正がヨーロッパから数種類の絹織物を持ち帰り

それをもとに研究を始めた。奉書紬や羽二重などに成功し、広く奨励した。これが基となって、明治、大正、昭和にかけて産地を築きあげ、福井県は織物王国となった。

■日本リンゴの父

春嶽は、政事総裁時代に米国からリンゴの苗木を取り寄せて、江戸郊外巢鴨の福井藩下屋敷で栽培し、一〇〇本以上の樹が生えていた。福井城内にも試農場をつくり果樹栽培の取り組みを入れた。研究を重ねた結果、東北地方の氣候が適していると分かり、津軽藩に苗木を贈呈した。これが青森の

リンゴ特産の始まりとなった。『新修福井史』によると、青森市(旧南津軽郡浪岡町)のリンゴ園には「日本リンゴの父・松平春嶽」の像が建てられ、その地方の尊崇を集めていた。日専連青森の協力で見地跡が確認されている。

■詩情豊かな文人

春嶽の学問好きは有名である。幼少のころ学習のためにたくさん紙を使い、家族から「羊のようだ」と言われ、自らも「羊堂」と号した。春嶽は海外の文化を吸収し、ローマ字で書いた日記も残っている。三四歳のころから蘭学や英学に関心を深め『袖珍和蘭辞典』を愛用した。本の見返しに自作の詩を書いている。おびたらしい短歌、漢詩、文集が『春嶽遺稿』全四巻にまとめられている。『大英国志』も取り寄せて研究した。書物の表紙には春嶽の押印があり、中にはたたくさんの朱筆と付記が残されている。

春嶽が残した歌は一五〇〇を超えている。「たのしみは」で始まる「独楽吟」で有名な橘曙覧との交わりも深かった。豆腐の歌で、曙覧が「たのしみはつねに好める焼豆腐 うまく煮たて、食わせける」と詠むと、春嶽は「楽しみ

は玉の霰あまのうつ窓に くらふ湯豆腐味のつく時」と応えるなど、心温まるやりとりがあった。

■明新館で近代化教育

藩校の明道館を設けて学術を奨励し、横井小楠もここで教え、二四歳の橋本左内を学監同様心得に任命した。橋本左内は一〇歳で漢文の『三國志』を讀破し、一五歳で『啓発録』に所信を表し、一六歳で緒方洪庵の適塾に学んだ。横井小楠らと交流し、帰国して藩医を継ぐが、再び江戸に出て西郷隆盛などと親交を結んだ。日露同盟論など、世界を視野に入れた国家構想を持つ逸材であった。

明道館(のちに明新館)は、日本の精神文化を基本としながら、科学教育を重視して外国文化を幅広く教え、日本の近代化を目ざした。洋書習学所や算科局も設け、一方で総武稽古所を置くなど和魂洋才の学風を養った。一八七〇(明治三)年に招かれた米国人・グリフィスが理科を教えた。化学実験室を設けて地球儀や顕微鏡、天体望遠鏡を用いた。そのほか、アメリカ文明やドイツ語、フランス語も教えた。彼は明治政府の要請を受けて東京の南校(東京大学の前身)に移るが、アメリカに帰国し

た後も日本学を広めた。

明新館は現在の藤島高校(旧福井中学)へと続き、元総理大臣の岡田啓介、小説家で政治家の中野重治、俳優の宇野重吉、心臓外科の榊原任などを輩出した。筆者もここで教えを受けた。

■医学の伝統 解体新書・杉田玄白

福井には医学の伝統がある。一七七四(安永三)年に小浜藩の杉田玄白らが蘭学を研究して、西洋医学の解剖書の翻訳や『解体新書』を出すなど先端を走った。一八〇五(文化二)年に福井藩内に医学研究所を設け、後に医学所「濟世館」となり、多くの医者やたくいまれな人材を輩出した。

一八六〇(万延元)年に解剖学の教材用にキュンストレーキ(人体解剖模型)を導入した。フランスの解剖学者オズーの作品で、今も男女二体が福井市立郷土歴史博物館に残っている。

天然痘は最も恐れられた病気のひとつだった。かかるとほとんど助からず、年間三〇万人が死んだ。完治しても顔に深い傷跡のあはたが残った。実は春嶽も九歳のとき重い天然痘にかかり、完治まで一年を費やしている。予防接種の普及の先駆けは笠原白翁である。

■春嶽がワクチンの輸入に尽力

笠原白翁は福井城下の町医者で、蘭方医学を志して京都で学んだ。ここで牛痘による天然痘の予防が可能であり、ワクチンの輸入が急務であることを知ったが、当時は輸入は御法度。

白翁の思いは募った。「春嶽公におすがりして種痘輸入の幕府の許可を得る以外にない」と、地元役人に嘆願書を提出したが、一向に上部には届かず数年が流れた。白翁は藩医の半井元冲が江戸に上ると聞いて必死に頼み込んだ。願いがかなって側用人中根雪江を通じて春嶽に上奏された。春嶽のアクションは早かった。幕閣を動かして老中阿倍伊勢守正弘から長崎奉行に対し、「輸入に協力すべし」との命令がされた。

一八四九(嘉永二)年、オランダから長崎へワクチンが入り、白翁はこれを求めて長崎に向かった。幸いにも京都の師匠の日野鼎哉ひのなるの元に送られており、これを手に入れ、子どもらへの接種に成功した。■命がけて予防接種普及・笠原白翁 一二月末、いよいよ福井にワクチンを送る日が来た。当時の予防接種は人から人へと植えついで行く「種継ぎ」が確実な方法だった。



笠原白翁（福井市郷土歴史博物館資料）

京都で予防接種した二児と、福井から呼び寄せた二児とその親と合わせて一三人で京都を発った。

途中で福井の子どもに接種をして木之本に泊り、翌日は大雪に覆われた栃の木峠の難関を目ざして子どもを背負い猛吹雪の中を進んだ。峠近くで疲労と寒さで意識が薄れて倒れかかったとき、迎える松明が近づいてきた。こうして難歩行の末、越前への二〇〇キロ余りを六日間で踏破したのだった。

福井に帰ってから大きな困難が待っていた。「牛の毒で人が死んでしまう」。早く植え継がねばならないが、領民が怖がって近づかなかった。妨害する漢方医もいた。「私財をなげうってでも人の命を救おう」と、白翁の決意は固かった。まず身内に接種して効果を認めさせ説得を重ね、ようやく

安心して受けるようになった。一八五一（嘉永四）年、全国に先がけて藩の除痘館が開設された。二年後には藩家中をはじめ、領民全員にワクチンを受けさせた。助かった人々は、「ありがたい」と手を合わせて拜んだ。幕府がワクチンを認め、江戸に除痘館を設けたのは、五年後の一八五六（安政五）年だった。

春嶽の足跡 政局変化と去就

前にも書いたように、桜田門外の変で井伊直弼が暗殺されたあと、幕府の方針が変わった。一八六二（文久二年）は「文久の改革」で七月に徳川慶喜が將軍後見職になり、春嶽は政事総裁職に任じられた。幕政改革に取り組んだ結果、参勤交代の緩和などが決められた。春嶽は「幕府は私政を去って公論に従い諸事を刷新すべし」と、公武合体論を唱えた。將軍家茂の上洛を押し進め、自らも翌年二月に上洛した。しかし京都では、長州藩など尊王攘夷派の意見が強く、慶喜がそれらとの妥協に傾いたため、三月に春嶽は意見が合わず政事総裁職を辞任した。一八六四（元治元）年八月一八日の政変で長州

藩が追放され、これに反撃して「禁門の変」を引き起こすが、破れて朝敵となる。そのとき春嶽は参与に任命され、二月に松平容保が軍事総裁になり、代わりに春嶽は京都守護職に就くが、四月には退いた。ついに長州征伐が始まる。一八六六（慶応二年）年は慌ただしかった。一月に薩長同盟ができ、六月に春嶽が上京、七月に將軍家茂死去、一二月に徳川慶喜が一五代將軍となり、孝明天皇が死去した。一九六七（慶応三年）年、長州藩の処分をめぐる、島津久光、山内容堂、伊達宗城（宇和島）らと四候会議を開き協議した。春嶽は長州征伐反対を主張したが通らず二次征伐が決められた。

藩が追放され、これに反撃して「禁門の変」を引き起こすが、破れて朝敵となる。そのとき春嶽は参与に任命され、二月に松平容保が軍事総裁になり、代わりに春嶽は京都守護職に就くが、四月には退いた。ついに長州征伐が始まる。一八六六（慶応二年）年は慌ただしかった。一月に薩長同盟ができ、六月に春嶽が上京、七月に將軍家茂死去、一二月に徳川慶喜が一五代將軍となり、孝明天皇が死去した。一九六七（慶応三年）年、長州藩の処分をめぐる、島津久光、山内容堂、伊達宗城（宇和島）らと四候会議を開き協議した。春嶽は長州征伐反対を主張したが通らず二次征伐が決められた。

念願の国会が開設

一八六八（明治元年）年一〇月一日に大政奉還となり、一二月九日、王政復古と新政府の樹立が宣言され、その前日に春嶽は朝廷より議定に任命された。慶応四年一月、鳥羽伏見の戦い起きるが、四月には江戸城の明け渡しとなった。春嶽は政事総裁職のときに大政奉還を唱え、議会構想を掲げていた。イギリスの議会に習い二院制とし、上院は幕臣や諸侯から、下院は諸士の人材をあてて農民、

町民も加えるも良しとしている。維新のあとは、内閣事務総督、一八六九年には民部卿、大蔵卿となるが翌年に政務を退いた。

春嶽が願っていた国会の開設は、一八八九（明治二二年）年二月、憲法発布で実現した。その翌年、東京小石川の自宅で六三歳の生涯を閉じた。「なき数に、よしやいるとも天翔り、御代を守らむ皇国のため」の辞世を残している。

平和と領民への思い

春嶽は徳川一門でありながら大政奉還を唱えたのは、議会制度を基にして、新しい日本を目ざしたからだ。大政奉還のあと、薩長による倒幕の戦いに反対し、將軍慶喜を素直に従わせ、自宅の一室に謹慎させて和平解決に尽力した。日本が内乱となり外国から狙われるのを食い止めたかったからだ。領民を思う心が強かった。幕末の大詰め、一八六七（慶応三年）年の春に越前海岸を視察した。「いまは桜鯛が捕れます、漁民から豊漁の話聞いて喜んだ。「海のさち あたえ玉ひてあさゆうに桜鯛よれ うらの春風」と詠んだ。丹生郡鮎川（現・福井市）の蛭子神社に「春嶽公さくら鯛の歌碑」が建てられている。